

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03489

研究課題名(和文) アメリカ革命の王政的解釈と立憲主義再定義

研究課題名(英文) Monarchical and imperial interpretation of the American Revolution and the redefinition of constitutionalism

研究代表者

石川 敬史 (ISHIKAWA, TAKAFUMI)

帝京大学・文学部・准教授

研究者番号：40374178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：イギリス領北アメリカ植民地が国王の特許状、すなわち国王大権によって成立したという素朴な事実にも再注目し、従来のホイッグ主義革命というアメリカ革命観を再検討し、より精度の高いアメリカ革命理解を構築することを目指した。この研究期間を通して、イギリス国制論の変化についてより厳密な知見を得るとともに、アメリカ革命がヨーロッパの知的遺産を受けつつも、高度に個人の権利に特化した立憲主義理解に立っていることが確認できた。本研究課題の期間中に有益な研究成果を出すことはできたが、それ以上に、次なる課題として、アメリカ合衆国憲法そのものの研究が必要であることを認識できたことが有益な成果であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究における諸活動(学術論文、研究発表、書籍の分担執筆)を通して、極めて多様で、しばしば分断状態に陥るアメリカ合衆国の現在の状況を把握するための視座を提供することに貢献できたと考えている。それはあくまで視座を提供したに止まり、当然ながらアメリカ合衆国の現在を把握するには不十分ではあるが、本研究によって次の課題が明瞭なものになったと考えている。本研究で得られた成果をさらに継続・発展させることによって、日本においても、また国外の研究においても決定的に欠けている西欧中心の政治思想史研究とは異なるアメリカ政治思想史のより新しい形を提示できると考えている。

研究成果の概要(英文)：Repaying attention to the simple fact that British North American colonies were established by the King's Patents, or Royal Prerogative, I aimed to reexamine the conventional view of the American Revolution as the Whiggist Revolution and to develop a more accurate understanding of the American Revolution. Through this research period, I gained more precise knowledge about the change of the British constitutional theory, and confirmed that the American Revolution was based on the understanding of constitutionalism that was highly specialized in individual rights while receiving the intellectual heritage of Europe. I was able to produce useful research results during this research project, but more than that, I am able to recognize the need to study the Constitution of the United States itself as my next task.

研究分野：アメリカ政治思想史

キーワード：連邦制 大統領制 共和政 混合政体論 政党政治 連邦政府 アメリカ革命 革命

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アメリカ革命史研究においては、ホイッグ主義革命としてアメリカ革命を理解する学説が長く支配的であった。しかし近年のより詳細な史料解析に基づく研究成果の進展に伴い、アメリカの若手研究者を中心により繊細な議論が展開されるようになった。その一例として、エリック・ネルソンのような研究者などは、アメリカ植民地の人々が権利の最終的拠り所としていたのは、国王大権であったという学説を提起するようになっていた。ホイッグ主義革命としてのアメリカ革命理解によれば、アメリカ革命とは近代的自然権思想を拠り所としたという、まさに「アメリカは近代から始まった」という長く支配的であったアメリカ観を構成していたのに対して、ネルソンらの研究においては、アメリカ革命が近世に起こった政治的出来事であったということ、そしてアメリカの諸植民地が国王の勅許状によって形成されたという、よく知られてきた素朴な事実を再検討することによって、これまでの図式的なアメリカ革命観に修正を加える試みであった。これは、申請者が長年研究してきたジョン・アダムズの政治思想、とりわけ彼の混合政体論の研究と平仄の合うものであった。申請者は、ホイッグ主義革命という最終的な大枠には同意しつつも、後者の知見を有効に活用することによって、これまでのアメリカ革命史研究の精度をより高め、革命の論理が変遷する歴史過程をより厳密に解明できるのではないかと考え、この研究計画を構想した。

2. 研究の目的

アメリカ革命は、王政から共和政への体制転換という点で、まさに革命であったことは確かであり、当時の環大西洋世界における「国王のいない統治体制」の樹立という観点からも、大きな政治的出来事であったのは確かであった。しかし、申請者が以前から気になっていたのは、大西洋兩岸の知識人社会における議論が、必ずしもまったく噛み合わないものではなかったということであった。つまり、「国王のいない統治体制」というアメリカ革命の構想は、必ずしも当時の環大西洋世界の知識人たちにとっては、驚天動地の出来事ではなく、当時の知識人の間に共有されていた知的基盤の上に行われた出来事だったのではないかという仮説を持つに至った。それは、今や古典となっている J・G・A・ポーコックの共和主義的歴史解釈におけるコモンウエル・マンの政治思想を改めて検討することを通して、アメリカ革命の王政的解釈を検討することを目的とすることになった。これは、「国王がいる共和政」という西洋史研究における近年の歴史解釈とも符合するものであった。つまり、共和政であるか否かは、国王の有無とは必ずしも関係がない。それゆえ、国王がいるからといってその国が必ずしも共和政でないとは言えないとするならば、国王がいない共和政の登場は必ずしも、当時の知識人社会にとって受け入れがたいものだったとは言えないのである。アメリカ革命がホイッグ主義革命であったという大枠そのものに申請者は同意しているが、その大枠そのものを否定せずとも、アメリカ革命をこれまでの紋切り型の解釈から解放し、より歴史学的に精度の高いものにすることが可能であると考えた。そこで、申請者が着目したのは、アメリカ革命が起こった時代が、近代ではなく近世であったという極めて素朴な事実であった。つまり、近世の思考枠組みが革命の過程で、近代的に変容する過程を解明できれば、これまでの支配的歴史解釈と近年の学説を統合的に論じることができるとの考えに至った。

3. 研究の方法

以上の研究を進めるにあたり、次の三点に重点を置き、研究活動を行った。これまで申請者が慣れ親しんできたゴードン・S・ウッドより後の世代のアメリカ革命史研究を検討する。特にアメリカの若手研究者の近年の研究に着目して学説の異動と変遷を明らかにする。初期アメリカ研究の中でも、政治思想史研究以外の歴史学研究成果を検討する。具体的には、環大西洋世界における宗教思想史研究、植民地時代を中心とする社会史研究、そして環大西洋世界の交易に関する経済史研究成果を吸収する。申請者が、これまで研究してきたジョン・アダムズの政治思想を の研究成果に基づいて再検討を加える。ジョン・アダムズは、混合政体論というヨーロッパの古典的政府理論に依拠してアメリカの統治機構を構想したため、これまでのアメリカ革命史研究では、時代遅れの人物としてあまり重視されてこなかったが、むしろ同時代の人々の視野を理解するには、アダムズのテキストこそが基準になり得ると考えた。そして以上の作業を踏まえて、アメリカ政治哲学の古典とされている『ザ・フェデラリスト』を改めて読み直した。これまでの通説では、ジョン・アダムズの政治思想は、民主化が急速に進展した 1780 年代以降のアメリカにおいては、古色蒼然たるものであったのに対して、『ザ・フェデラリスト』は、アメリカの近代的状況に適応したものであったという理解が定着していたが、本研究の過程で、実は前者がヨーロッパの古典的思考枠組みをアメリカ化したものであること、そして後者は近世の知的条件の中では極めて新奇性の高い、理論的には飛躍の多い文書であったことが分かった。換言するなら、実は両者は共に極めて「アメリカ的」な文書であり、ヨーロッパ政治思想史におけるテクニカル・タームを使用しながらも、それはアメリカ政治思想史がヨーロッパとは大きく異なるものになっていたことの顕著な特徴を示すものであったことを示している。本研

究の方法は、こうして、ヨーロッパ政治思想のアメリカナイゼーションを明らかにする作業となっていた。

4．研究成果

本研究期間にその試論となる論考及び研究発表を繰り返し行う機会を得たが、最終的な成果は、発表論文の報告書にもある通り、研究期間最終年度に発表した、「ジョン・アダムズの混合政体論における近世と近代」(日本アメリカ学会編『アメリカ研究』53号、35-57頁)と、「アメリカ革命期における主権の不可視性」(日本政治学会編『年報政治学』2019- 、96-116頁)に結実した。必ずしも、当初の研究計画のすべてを達成したものではないが、多忙な学務と研究予算の範囲で可能なことは実現できたと考えている。上記の研究成果は、近世のアメリカが急速に近代的思考枠組みに変容したことを歴史学的に明らかにしたものであると同時に、政治思想史研究としては、西欧政治思想史とは異なる、アメリカ政治思想史の基盤整備に貢献するものであったと考えている。つまり本研究の最大の研究成果は、アメリカ政治思想史という研究分野の可能性を導いたことにある。本研究を構想した段階では必ずしも見えていなかった今後の研究目標を明確にしたことが本研究の意義であったといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石川敬史	4. 巻 14
2. 論文標題 書評：ロバート・D・パットナム、デイヴィッド・F・キャンベル（柴内康文訳）『アメリカの恩寵－宗教は社会をいかに分かち、結びつけるのか』（柏書房、2019年）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ビューリタニズム研究	6. 最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川敬史	4. 巻 2019-
2. 論文標題 アメリカ革命期における主権の不可視性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報政治学	6. 最初と最後の頁 96-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川敬史	4. 巻 53
2. 論文標題 ジョン・アダムズの混合政体論における近世と近代	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アメリカ研究	6. 最初と最後の頁 35-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川敬史	4. 巻 5号
2. 論文標題 収斂としてのアメリカ革命	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Nyx	6. 最初と最後の頁 248-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川敬史	4. 巻 11
2. 論文標題 北アメリカ植民地における人権概念の契機	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ピューリタニズム研究	6. 最初と最後の頁 21-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川敬史	4. 巻 18
2. 論文標題 書評：遠藤泰生編『近代アメリカの公共圏と市民-デモクラシーの政治文化史』（東京大学出版会、2017年）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アメリカ太平洋研究	6. 最初と最後の頁 157-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 啓蒙知識人としてのジョン・アダムズ のユニテリアニズムと世俗政府
3. 学会等名 日本ピューリタニズム学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 フェデラリスト政権と奴隷貿易：同盟、党派抗争、地域間対立
3. 学会等名 基盤研究(B)「メイフラワー・コンパクトにおける『排除/包摂の理論』と環大西洋文化」研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 初期アメリカ共和国における主権理論の模索
3. 学会等名 社会思想史学会第43回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 アメリカ史における主権論
3. 学会等名 北海道大学「主権はいま」研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 大西洋のアメリカ、太平洋のアメリカ
3. 学会等名 立命館アジア・日本研究機構プログラム報告（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 ジョン・アダムズの混合政体論における近世と近代
3. 学会等名 法政大学政治理論研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 イギリス領北アメリカ植民地の指導者層にとっての常識哲学
3. 学会等名 イギリス哲学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川敬史
2. 発表標題 北アメリカ植民地における人権概念の契機
3. 学会等名 日本ピューリタニズム学会（招待講演）
4. 発表年 2016年～2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 成田龍一・長谷川貴彦編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 230
3. 書名 世界史 をいかに語るかーグローバル時代の歴史像	

1. 著者名 山下範久編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東洋経済新報社	5. 総ページ数 456
3. 書名 教養としての世界史の学び方(石川担当「第6章 大西洋のアメリカと太平洋のアメリカ」、209-247頁)	

1. 著者名 社会思想史学会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 888
3. 書名 社会思想史事典(石川敬史担当「アメリカ革命をめぐる諸思想」、250-251頁)	

1. 著者名 神保哲生、宮台真司編著	4. 発行年 2017年
2. 出版社 光文社	5. 総ページ数 397
3. 書名 反グローバリゼーションとポピュリズム：「トランプ化」する世界	

1. 著者名 池田嘉郎、上野慎也、村上衛、森本一夫（編集）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 山川出版	5. 総ページ数 261-263、270-272
3. 書名 名著で読む世界史120	

1. 著者名 イリジャ・H・グールド(森丈夫監訳)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 163-206
3. 書名 アメリカ帝国の胎動 ヨーロッパ国際秩序とアメリカの独立	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----